

【小説】輪唱ラヴソング (二)

曾良圭

4

「じゃーん……」と言って横田は軽く握った右手を前に突き出した。

坂本が右手を出して身構える。俺も右手を出す。沈黙。意外と長い。ちよつと焦れたところで横田がひと息に言った。

「けんぼん」

変則的なリズムに意表を突かれて俺はあわてて手を開いた。パー。坂本はチョキ。横田もチョキ。俺の負けだった。

「じゃ、よろしく」

坂本が折り畳まれた千円札を差し出す。俺は舌打ちして金を受け取ると、無造作に制服のポケットに押し込んだ。

納得がいかなかった。普通は「じゃん、けん、ぼん」だろう。「じゃん……けんぼん」だなんて、騙し討ちにあったような気分だった。卑怯じゃないか。でも、文句

を言ってもはじまらない。

「いつてらっしゃい」横田が勝ち誇った笑顔で手を振る。「別に急がなくてもいいよ」

ああ、そうですか。俺は横田を睨みつける。もしかしたら横田が一緒に行くと言ってくれるのではないかと期待していた。勝手に期待して、勝手にふてくされて、馬鹿みたいだ。告白してふられたくせに、何を期待しているんだ？俺は投げやりに「いつてきまーす」と言つて頭の上で手を振って部屋を出た。

ああ、面倒くさい。

だいたい、横田は何だつて急に部屋の掃除をするなどと言いつたのだろう。いや、確かに部屋は汚い。部員が買ってきては放置しているコミック誌は溜まる一方だし、部誌の製本作業で使ったホチキスや両面テープや表紙用の色上質紙は長机のうえに出しつ放しだし、食玩のフィギュア、CD-R、携帯ゲーム機やゲームソフトといった誰の持ち物か判然としない雑多ものが溢れ返っている。だけど、それは今にはじまったことじゃない。俺

が入部してから、一日だって部室がきれいに片づいていくことなどなかった。部室が汚いと誰かが口にする、誰もが相槌を打って同意するのだが、いざ片づけようという話になると、次の部誌を作り終えたら、試験が終わつたら、来週には、また今度、といった調子で先延ばしにされるのが常だった。みんな面倒くさいのだ。俺だつて面倒くさい。

ところが、鍵を開けて部室に入るなり、横田は「部室を片づけよう！」と断固とした口調で宣言した。俺は控えめに抵抗を試みたが無駄だった。そこに坂本がやってきた。坂本は横田の提案にあまり乗り気ではない様子だった。しめた、と思った。二対一なら横田に勝てるかもしれない。甘かった。

「咲子センパイに怒られても知りませんよ」

横田は言った。あつさり坂本が折れた。二対一。俺は抵抗をあきらめた。

漫画研究部の部室のある三階から二階まで階段を降りて、そのまま一階まで降りようと足を踏み出したところで、本校舎と新校舎をつなぐ二階の通路を歩いてくる秋庭の姿が目に入った。俺は声をかけようとして、すぐに思い留まった。部室には横田と坂本が二人きり。俺とし

ては、かなりおもしろくない状況だった。秋庭が部屋に行くのを黙って見過ごせば、横田と坂本の邪魔をすることができると。ざまあみろ。

「秋庭先輩」

でも、俺は声をかけた。気を利かせて邪魔が入らないようにしてやるのが「友達」というものだろう。感謝しろよ、横田。

「あれ、もう帰るのか？」

「いえ、ちよつと買い出しに」

さて、どうやって秋庭を買い物につきあわせようかと思索する。

部室の片づけは、まずコミック誌を捨てることから始めようという話になった。必要なものと不要なものに分類して、ビニール紐で縛り、ゴミ置き場に持つていく、という段取りで作業を進めようとして、肝心のビニール紐がほとんど残っていないことに気づいた。おまけに部の備品のハサミはガムテープを切ったときに粘着部分が刃に付着してそれをティッシュペーパーで拭おうとして余計に状況を悪化させてしまったらしく、まったく使い物にならないし、カッターの本体はあるけれど替え刃が見つからず、縛ったビニール紐を切ることができなかつ

た。漫画研究部員のくせに、誰一人、カッターすら持ち歩いていないという衝撃の事実も明らかになった。結局、誰かがビニール紐とカッターの替え刃を買いに行くということになり、費用は部費から出すと坂本が請け合った。ただし、学校の近くにある文房具屋ではなく、駅向こうにある百円ショップで買うことが条件だった。駅までは徒歩で十分足らずの距離だが、照りつける陽射しのなかにわざわざ自分から進んで出て行くというものの好きはなかったたので、じゃんけんで決めることになった。そして、俺が負けた。

「今、部室の掃除をやってるんですよ」素直に現状を伝えるのが得策だと判断して、俺は秋庭に言った。「手が足りなかったんで、助かります。グッドタイミング」

「そうかそうか。進んで部室を片づけようなんて、実に感心な後輩たちだ」秋庭はわざとらしい口調で言って、目頭を指で押さえながら感慨深そうにしきりにうなずいた。「じゃあ、受験生であるオレは、頼もしい後輩たちに一切を託して帰宅するでしょう。みんなに気を使わせるのも悪いしな」

こんなときだけ受験生ツラかよ、と俺は内心でつぶこんだ。呼ばれたわけでもないのに、秋庭は今でも週に三

回は部室に顔を出している。受験生だからといって、今さら誰も気を使うはずがなかった。

俺は踵を返して立ち去ろうとする秋庭の肩を掴んだ。今の部室の状況は、前部長である秋庭の責任でもある。そもそも、部室に散乱しているコミック誌の半分は、秋庭が持ってきたものだった。

「逃げようたって、そうはいきませんよ」

「あ、やつぱり」

「暑い」と秋庭は言った。「死ぬ」

学校を出てから、秋庭はその二言をひたすら繰り返している。うるさい。だけど、相手にすると余計に調子に乗るのはわかっていたので、苛立ちつつも無視していた。秋庭に買いたい物につきあってもらおうとしたのは失敗だったかもしれない。

校門を出て住宅街を抜け、商店街を通って駅に向かう。できるだけ建物や街路樹のつくる日陰を歩くようにしたけれど、アスファルトから立ちのぼる熱気に制服のワイシャツはすぐに汗まみれになった。暑い。でも、口に出すのは我慢する。線路を渡るために駅の階段をのぼり、

構内を通り抜けて階段を降りる。駅の反対側に出て、バスのロータリーを回ったところにあるショッピングビルに入る。エアコンの冷気が汗ばんだ肌に心地よかった。

「極楽極楽」秋庭はハンカチで首の汗を拭いながら言った。「さつさと買い物を済ませて、ちよつとさぼっていいこうぜ」

俺は苦笑してうなずいた。まあ、それくらいは許されるだろう。

エスカレーターで三階まで上がり、狭い通路の両側に隙間なく商品が並ぶ百円ショップの店内に足を踏み入れる。俺はまずカッターの替え刃を、次に玉状の梱包用ビニール紐を手を取った。

「こつちのほうがよくないか？」

秋庭は隣に並んでいるビニール紐を指し示した。ロープのように繊維の束がよりあわされたもので、俺が手にしたビニール紐より太くて丈夫そうだった。

「でも、雑誌を縛るだけです」

同じ値段でも三分の一の長さしかない。つまり、すぐに使いきってしまう。なんとなくもつたいない気がした。「いや、絶対にこつちのほうがいいって。縛った雑誌を運ぶとき、そつちの紐だと手に食い込んで痛いんだよ。」

安物買いの銭失いっていうだろう」

力説されると、なるほど、そうかもしれない、と思う。どうせ自分の金ではないので、秋庭の助言に従うことにした。レジで会計を済ませて百円ショップを出る。

「買った物終了。あとは学校に戻るだけだった。」

「お」

秋庭が隣のCDショップに引き寄せられるように歩いていった。また自分勝手に、と思いつつながら、俺は秋庭の後についていく。CDショップの店頭では、女性アーティストのビデオクリップが流れていた。スローテンポのバラードで、確か、ドラマの主題歌だったはずだ。

秋庭は足を止めて画面に見入っている。

「ファンなんですか？」

俺は秋庭の横に立ち、画面に目を向けながら訊ねた。「顔が好み」秋庭は画面に目を向けたまま言った。口元がにやけている。「でも、音楽にはあんまり興味ない。CDは買ってるけど」

そうか、秋庭はこういうタイプが好きなのか。俺は下世話な好奇心に促されて画面に映るアーティストの顔に改めて注目した。ストレートの長い髪。やや垂れ気味の大きな目。ふつくらした唇。確かに整った顔立ちで、美

人だとは思う。でも、俺の好みではなかった。

ふと気づいた。

「この人、ちよつと中里先輩と雰囲気が似てますね」

「うん。もともと顔立ちが似てるんだよな。あいつが一年のときには不覚にも全然気づかなかったんだけど」

二年生になって中里が突然「変身」したという話を俺は初めて知った。眼鏡をコンタクトに変え、いつのまにか長く伸ばしていた髪をほどいた中里の姿を見て、秋庭はとても驚いたという。

「正直、ふつたことを後悔したね」

「誰が誰を？」

「あれ、知らない？ 余計なこと言つたな」

中里が一年生、秋庭が二年生のときだった。

わたしとつきあつてください。中里は思い詰めた表情で言つた。悪いけど、中里のことをそういうふうには見れない、と秋庭は即答した。どうしてですか？ 中里は食い下がった。秋庭は女性アーティストの名前をあげて、オレ、ああいうタイプが好みなんだよね、と言つた。

もつと他の言い方があるだろうと俺は中里に同情した。今さら文句を言つても仕方ないことだけだ。

「結局、オレの目が節穴だったというわけだ」

はじめた。

「あるところに、かつこ良くて頭が良くて漫画を描くのがとても上手な高校生の男の子がいました。仮に名前をAくんします」

反応したら秋庭の思うつぼだ。俺は水滴のはりついたグラスを手に取り、ストローでコーラを啜つた。

もつとも、秋庭が「かつこ良くて頭が良」いかどうかはともかくとして、「漫画を描くのがとても上手な高校生の男の子」であることに異論はなかった。秋庭の描く作品は、商業誌に掲載されている漫画と比べて遜色のないレベルだと俺は思っている。ただ、残念なことに秋庭の作風はまったく俺の好みではなかった。異性の好みのタイプといい、どうも秋庭とは趣味があわないらしい。

「Aくんは高校では漫画研究部に所属していました。人柄もよく、才能にあふれるAくんは、部の仲間から慕われ、とても尊敬されていました」

「言つて虚しくないですか？」

「細かいことを気にするな」

まあ、一年生である俺の無礼な物言いに對して怒りもせず鷹揚に受け流しているのだから、「人柄がよい」というの間違いではない。俺がついつい秋庭の発言にか

すっかり自分好みに「変身」した中里に、秋庭は前言を覆して自分からつきあつてくれと言おうとも考えた。その必要はなかった。中里から再び告白されたのだ。

しつこいと思うかもしれないけど、わたしとつきあつてください。お願いします。

中里は秋庭とつきあうために、秋庭の好みにあわせて「変身」した。つまり、そういうことだろう。

「で、秋庭先輩はOKしたんですか？」

俺の質問に、秋庭はなぜか大袈裟な溜め息をついた。

「立ち話もなんだから、ミスドにも行こうぜ。飲み物くらいならおごつてやるよ」

「この物語はフィクションであり実在の人物・団体とはいつさい関係がありません」と秋庭は言つた。

何を今さら、と思いつつ俺は黙つてうなずいた。

ミスドの店内は学校帰りの高校生がグルーブや買い物帰りの親子連れで混み合つていた。店の一番奥にある二人掛けのテーブルに、俺と秋庭は向かい合つて座つてゐる。秋庭はストローを使わずにアイスコーヒのグラスに直接口をつけると、やけにもつたいぶつた口調で話し

らんでしまうのも、ある意味では「慕つている」といえるのかもしれない。秋庭を「尊敬」している奇特な部員もいないわけじゃない。そもそも、あくまで「フィクション」だと秋庭が前置きしているのだから、いちいち「現実」と比較しても仕方がない。疲れるだけだった。「Aくん」の後輩に「Bさん」という女の子がいました、と秋庭が言い、あれ、中里咲子だから、「Nさん」（あるいは「Sさん」）じゃないの？ と思つたが、どうやら「Aくん」というのはイニシャルではなく単なる仮名だったらしい。

秋庭はCDショップの店頭で語つた話を、律儀に仮名に置き換えて繰り返した。「Bさん」から「Aくん」への告白。二年生になつた「Bさん」の「変身」。そして、「Bさん」から「Aくん」への二度目の告白。

結局、「Aくん」は最初のときと同じように「Bさん」からの告白を断つた、と秋庭は語つた。

「どうして？」俺は思わず訊ねた。

「Aくんには他に好きな人がいたんだ」

「じゃあ、『自分のほうから告白しようかとも思つた』つていうのは何だったんですか？」

「Aくんはその人のことをあきらめてBさんとつきあお

うと思った。でも、やつぱりあきらめきれなかった」
「誰なんですか？ その好きな人って？ 俺は興味本位で訊ねた。どうせ、「Cさん」とでも返されるのがオチだろうけど。」

「この話には関係ないから気にするな」

秋庭は素っ気なく言った。関係なくはないだろうと思つたけど、しつこく訊ねるのはやめた。

秋庭は皿にのつたオールドファッション・ドーナッツを両手で掴み、真ん中で二つに割つた。ひとつくれるのかと思つたが、そうではなかつた。かといって、自分で食べるわけでもなく、そのまま皿に戻した。俺はコーラを啜つた。秋庭は約束どおり飲み物をおごってくれたのだが、本当に飲み物だけだつた。もちろん秋庭が自分の分だけドーナッツを買つたからといって、文句を言う筋合いではないのはわかつてる。

断られても「Bさん」は引き下がらなかつた。「Aくん」に一度でいいからデートして欲しいと訴えた。「Aくん」は本当に一度だけという条件で「Bさん」の申し出を承諾した。

二度目の告白のあつた週の土曜日、「Aくん」と「Bさん」は初めて学校以外で会うことになつた。駅前で待

ち合わせ、モスバーガーでハンバーガーと飲み物を買つて、駅の近くにある市営の自然公園に向かつた。会話は少なかつた。池の近くにあるベンチに二人で並んで腰掛け、コーラを飲みながら冷めかけたハンバーガーを食べた。味はよくわからなかつた。

「Bさん」の肩が「Aくん」の腕に触れた。風になびく髪から甘い香りがした。「Aくん」はやけに喉が渴いて、すぐにコーラを飲み干してしまつた。自分がひどく緊張していることに気づいた。よくない兆候だと思つた。必要以上に「Bさん」を意識していた。

オレのどこがいいわけ？ 「Aくん」は訊ねた。「Bさん」がそこまで自分に執着する理由がよくわからなかつたのだ。「Bさん」は「Aくん」の目をまつすぐに見返し、顔かな？ と答えた。一目惚れ、みたいなのです。俺は思わず秋庭の顔を見た。

「なんだよ？」

「いえ、別に」

目を逸らしてコーラを啜る。この話はいくまで「フィクション」で、「Aくん」は「かつこ良い」という設定なのだ。「実在の人物とは一切関係ない」。それに、好みは人それぞれだ。

秋庭はドーナッツの片割れをさらに二つに割り、また食べずに皿に戻した。次にもうひとつの片割れを三つに割り、やはり食べずに皿に戻した。皿の上には、五つに分割された一口サイズのドーナッツが一直線に並んでいる。ちよつと苛々した。

勢いで告白して、でも、ふられちゃつて、わたし、いろいろ考えたんです。先輩とどうしてもつきあいたくて「Bさん」はそう言うのと、不意にベンチから立ち上がった。前に進み、「Aくん」の正面に立つて振り返つた。

先輩、こういう女の子、好きでしょ？ わたし、先輩に好かれようと思つてがんばつたんですよ。どうしてダメなんですか？

「Aくん」は好きな人がいることを白状した。

その人に告白しないんですか？

告白して、ふられた。でも、「Bさん」とはつきあえない。

どうして？

どうしても。

あー、もう、面倒くさいなあ！ 「Bさん」は不意に低い声で言つた。それならつきあつてくれた方がいいじゃない。ふられたんなら、さつきとあきらめなさいよ。

その言葉、そのままお返しします、と「Aくん」は小声で言つた。「Bさん」に睨まれて、目を逸らした。言わなきゃよかつた。

ねえ、先輩。ちよつと手を出して。

「Aくん」はおそろおそろ右手を出した。「Bさん」はベンチに置いてあつたトートバッグを手元を引き寄せるのと、中から取り出した小さくて四角いものを「Aくん」の手のひらに載せた。コンドームだつた。

あげる、と「Bさん」は言つた。

「どういう意味だと思う？」と秋庭は言つた。

そんなこと俺にわかるはずがない。

「もし今泉がAくんの立場だつたら、どうする？」

それは「Bさん」が誰であるかによつて違う。仮に「Bさん」が横田だつたら、と考えると、でも、それじゃあ、同じように判断できないと思ひ直す。相手が横田だつたら、俺ははじめに告白された時点で迷うことなくOKしている。

「Bさん」を想像してみる。容姿はわりと好み。でも、横田ほどではない。俺は横田にふられて……と考えると、その点で自分と「Aくん」がよく似た立場であることに気づく。想像が急に現実感を増す。横田にふられた現在

の状況で、わりと好みの女の子「Bさん」に告白されたら、俺はどうするだろう。幸か不幸か、身近に思い当たるような女の子はいなかった。あくまで仮定の話。悩むまでもなかった。俺は断るだろう。間違いないと思う。榎田をあきらめることはできない。

でも、ちよつとくらいは「つきあってもいいかな」と考えるかもしれない。なるほど。俺はようやく「Aくん」の心理を理解した。一度だけでいいからデートしてほしいと言われたら、やつぱり断れないだろう。つきあう気がないとはいえ、二人だけで出かければ、相手を意識してしまふだろう。その状況でいきなりコンドームを手渡されたら、俺はどう解釈してどう反応するだろう？俺はセックスはもちろんキスの経験すらない（間接キスだけ）。「Aくん」には経験があるのだろうか？俺は秋庭の顔を見た。秋庭は五つに割ったドーナツのひとかけらを口に放り込み、ほとんど嘔まずにアイスコーヒード流し込んだ。俺が返答するまで話を進めるつもりはないらしい。

「Bさん」は「Aくん」の気を引くために「Aくん」の好みにあわせて「変身」した。でも、うまくいかなかった。次に「Bさん」は「Aくん」にコンドームを手渡

した。その意味を「Aくん」がどう解釈するか、「Bさん」が理解していないとは思えないから、「Aくん」の気を引くことが目的なのは間違いない。直接的なのか婉曲的なのか判断に困る、ちよつとずれたやり方だという気がするけど。

実際に「Aくん」と同じ状況におかれた場合、俺だったらどうするだろうと考える。誘惑に負けるかもしれないし、尻込みするかもしれない。まったく想像がつかなかった。でも、やつぱり榎田をあきらめることはできないと思う。俺は「Bさん」からコンドームを受け取ることを拒否するだろう。確信ではなく決意ですらなく単なる願望にすぎないけど、その結論を控えめに口にする。「いや、普通だったら受け取るだろ」秋庭は軽い口調で断言した。「女の子にそこまでさせておいて、引き下がったら男じゃない」

そうだろうか？別にセックスしたいと考えることが悪いとは思わない。セックスが目的でつきあいはじめたってお互いが納得していれば構わないと思う。でも、それを「普通」とか「男」といった言葉で正当化するのはいや、卑怯じゃないか。

「睨むなよ。単なる一般論だ」と秋庭は肩をすくめた。

わたしのこと嫌いですか？「Bさん」は「Aくん」

の顔を覗き込んだ。「Aくん」は首を左右に振った。別に「Bさん」が嫌いなわけじゃない。それは確かだった。じゃあ、わたしとつきあおうよ。「Bさん」は「Aくん」の右手に右手を重ねた。

「Aくん」はうなずいた。

「Bさん」は笑った。ありがとう。

「Aくん」の負けだった。でも、悪い気分ではなかった。気が楽になった。片思いに疲れていたのだ。セックスがしたいわけじゃない。別にしなくて構わない。「Bさん」とつきあって、楽しく過ごせばいいな、と思った。とてもいい気分だった。「Bさん」を見た。

「Bさん」は「Aくん」の手から素早くコンドームを取り上げた。あの、別に今すぐつてことじゃないですよ。つきあって、いろいろ話して、メールして、一緒に遊んで、お互いしてもいいなと思えるようになったら、ちゃんとしようねつてことですから、と「Bさん」は早口に言った。ごめんね。

「Aくん」は右手で空を掴んだ。なんだよ、それ。最初からそういうつもりだったのかよ。セックスを餌に男を釣って得意顔かよ。自分が釣られたという自覚があるだ

けに余計に腹が立った。最悪の気分だった。

なら、いいや。「Aくん」は投げやりに言った。それならわざわざつきあう意味ないだろ。

それが本心なのかどうか、自分でもよくわからなかった。でも、そう言えば絶対に「Bさん」があわてると思つたのだ。効果はあつた。

「Bさん」の顔から表情が消えた。そして、笑った。冗談ですよ。本気にしないでください。「Bさん」はコンドームを「Aくん」の右手に押しつけるようにして握らせた。お願いですから、ちゃんと避妊はしてくださいね。「Aくん」はうなずいた。もう後には引けない。

そのかわり、わたしとつきあつてくださいな。約束ですよ。

「Aくん」はうなずいた。

「そして、AくんとBさんはそのままホテルに行きましたとき。ちゃんちゃん」

秋庭はドーナツのかけらをもうひとつ口に放り込んだ。皿を俺のほうに差し出して、口の中にドーナツを入れたまま「食べる？」と不明瞭な発音で言った。さっきまでずつと食べたいと思つて見ていたのに、すっかり食欲はなくなつていた。首を左右に振った。秋庭は指先

のドーナツのくずを払い落とし、アイスコーヒーを飲み干した。

「約束どおり、AくんはBさんとつきあいはじめた。いや、会ってホテルに行くだけの関係をつきあってるっていうんらだけどぎ」

「Bさん」は義務のように「Aくん」とセックスするだけだった。何も語らなかつた。何も望まなかつた。

「Aくん」は後悔していた。でも、今さら違う関係を築きかけは見出せなかつた。

二人がつきあっているといえるのかどうか、俺にはわからなかつた。ただ、二人の感情がどこか決定的に食い違つてしまっていることだけははっきりとわかつた。

「悩めるAくんには何かアドバイスをお願いします」と秋庭は言った。

俺は考えた。話を聞いて、引つかかっていることがひとつあつた。それが二人の関係を修復する鍵になるかもしれない。「Bさん」が「Aくん」に執着する理由。一目惚れだと「Bさん」は言った。でも、それだけじゃない気がする。単なる勘だけだ。

「それがわかれば、お互いの理解が深まるんじゃないですか」と俺は言った。そんなことしか言えなかつた。

今泉が部屋を出て行くと、私と坂本は顔を見合わせた。「まだ教えてあげてないんだ」と坂本は言った。

「もちろんです」と私はうなずく。

これからも教えるつもりはなかつた。

今泉はじゃんけんで手を出すタイミングが狂うと必ず最初にパーを出す癖があつた。本人はそのことに気づいていない。だから、うまくやれば、今泉にはじゃんけんで確実に勝つことができた。もちろん、毎回同じ手段を使つては気づかれてしまうので、普段は小細工なしで勝負している。でも、今日は特別だつた。どうしても勝つ必要があつた。

勝負するにあたつて、私は坂本に目で合図した。今泉の癖については以前に一度話したことがあるだけだったから、意図が伝わるかどうか不安だつたけど結果的にうまくいった。これで今泉は三十分は戻つてこないはずだ。ごめんね、今泉。

私は坂本に目を向けた。鼓動が速くなる。自分が緊張しているのがわかつてさらに緊張する。自分から告白す

るのは初めてなのだ。純粋な意味での「告白」ではないけれど、同じくらい勇気が必要だつた。失敗は許されない。でも、大丈夫。坂本は中里にふられたばかりなのだ。私にとつてはチャンスだつた。先延ばしにすると、きつと挫けてしまう。今、言わなきゃ。

大きく息を吸つた。

「とりあえず片づけをはじめようか」坂本が言った。

思わず溜め息をついた。「そうですわね」とうなずいた。

顔がひきつっていたかもしれない。仕切り直そう。まだ時間はある。

私は長机のうえに積まれたコミック誌を、少年誌と青年誌に分類する。少年誌は背が糊づけされていて平らなので、まっすぐに積み上げることができると、青年誌は背がホチキスで留められていて膨らんでいるので、同じ向きで積み上げると傾いてしまう。あらかじめ青年誌だけまとめて、一冊ごとに互い違いに重ねておけば、紐で縛るときに作業がしやすい。

坂本は長机のうえに放置されている雑多なものをひとつひとつ確認しては、スチール戸棚にしまい、ごみ箱に放り込み、段ボールに詰めている。

長机のスペースが足りなくなつた。分類したコミック

誌をどこかに移動する必要がある。どうせすぐに捨てるのだから、とりあえず廊下に出しておこう。

積み上げた少年誌を両手で抱えてドアに向かつた。失敗した。先にドアを開けておくべきだつた。私は坂本に声をかけて、ドアを開けてくれるよう頼んだ。坂本のために場所をあげようと、一步、後ろに下がつた。その拍子に、抱えているコミック誌が傾いた。崩れはしなかつたけど、一番上の一冊が床に落ちた。

「すみません。拾ってもらえますか？」と私は言った。

「了解」

坂本は屈み込んで、私の足元に落ちたコミック誌に手を伸ばした。その手が私の足首を掴むのではないかという不安に駆られて反射的に足を引いた。もちろん、気のせいだつた。坂本がそんなことをするはずがない。でも、足を引いたせいで、抱えているコミック誌が大きく傾き崩れた。屈み込んだ坂本の頭にコミック誌が音を立てて降り注いだ。私は悲鳴をあげた。

「いてて」

坂本が後頭部をさすりながら身体を起こした。

「すみません」と私は言った。声が裏返つている。必要以上に声が大きくなつてしまう。

「大丈夫ですか？」大丈夫なわけがない。私は泣きそうになる。でも、泣いてどうする。

「大丈夫、大丈夫」坂本は笑いながらずれた眼鏡の位置を直した。「ちょっとびっくりしたけど」

私は坂本の頭に手を伸ばした。少しくせのある硬い髪のうちから頭皮に触れた。坂本が一瞬、肩を震わせた。瘤ができている。あわてて手を引っ込めた。

「ごめんなさい」声がかすれる。「ごめんなさい」他に言うことはないのか。「ごめんなさい」

「本当に大丈夫だから」と坂本は言った。

私は深呼吸をする。落ち着け、と自分に言い聞かせる。坂本が心配そうに私の顔を覗き込んだ。立場が逆だった。私の心配なんてしなくていい。目があった。亮ちゃんによく似た目。私は不安になる。

靴紐がほどけてるぞ。

亮ちゃんに指摘されて足下を見ると、確かに右脚のスニーカーの紐がほどけていた。

しょうがないな。結んでやるよ。亮ちゃんは私の足下にしゃがみ込み、私の右脚のスニーカーの紐を結び直してくれた。こつちも緩んで。左のスニーカーの紐もいっただん結び目を解いて、結び直してくれた。

ありがとう、と私は言った。最近、頻繁に亮ちゃんにスニーカーの紐を結び直してもらっている気がする。普段はそれほど頻繁に紐がほどけることなんてないのに、とちよつと思議に思う。

小学六年生の夏休みだった。私の家族と亮ちゃんの家は、一緒に田舎の祖父父母の家に遊びに行った。未成年は私と亮ちゃんの二人だけだったので、自然と一緒に過ごす時間が多くなった。

子供の相手させちゃってごめんね、とママは亮ちゃんに言った。子供じゃないよ！と私は抗議した。そうだよな、子供じゃないよな、と亮ちゃんは言った。私は大きくうなずいた。

私と亮ちゃんは裏山にある神社の境内でキャッチボールをしたり蝉を捕まえたり亮ちゃんが持ってきたデジカメでいろいろなもの撮影したり亮ちゃんに写真を撮ってもらったりして遊んだ。休憩しよう、と亮ちゃんが言って、ママが水筒に入れてくれた冷たい麦茶を飲んで、またキャッチボールをしようとしてグローブを手にしたところで、亮ちゃんが靴紐がほどけてるぞと言って、結び直してくれたのだった。

亮ちゃんはなかなか立ち上がろうとしなかった。どう

したの？と私は不安になって声をかけた。いきなり亮ちゃんが私の両足首を掴んだ。びっくりしてバランスを崩した。足首を掴まれているので、うまく体勢を立て直すことができなかった。石畳に尻餅をつき、肘を打った。

亮ちゃんをあわてて私の足首から手を離れた。
ごめん！大丈夫！

お尻と肘が痛かった。すぐに動けなかった。涙が滲んだ。でも、泣くのは我慢した。目をきつく閉じた。とても痛かった。

びっくりさせようとしただけなんだ、と亮ちゃんは言った。そうなのかもしれない。冗談のつもりだったのかもしれない。でも、怖かった。びっくりしただけじゃなくて怖かった。何が怖いのか、自分でもはっきりわからなかった。ただ怖いと思った。足首に残る手の感触。強い力。

ごめん。本当にごめん。

亮ちゃんはひどく動揺していた。私が泣き出すのではないかと恐れているようだった。でも、私はこんなことでは泣かない。告げ口もしない。

立てる？

亮ちゃんは私に手を差し伸べた。私は無言で一人で立

ち上がった。スカートについた埃を払った。肘を見ると、擦り剥けて血がにじんでいた。

お詫びに何か買ってあげるよ。

私は首を左右に振った。何も欲しくなかった。

きつかけは、それだけのことだった。嫌いになったわけじゃないけど、私は亮ちゃんを避けるようになった。

だから、本当は亮ちゃんと二人きりで買い物に行くのは厭だったのだ。認めたくないけど、本当はそうだった。パパかママについてきてほしかった。そうでなければ、約束をキャンセルしたかった。卒業式の日にも男の子に遊園地に行こうと誘われて、私は告白に浮かれたつても、これで亮ちゃんとの約束を延期できると冷静に考えた。亮ちゃんに電話して、「デート」という単語を必要以上に強調した。結局、たつた一日延期になっただけだった。厭だな、と思った。ただ漠然と、厭だな、と思った。

亮ちゃんが事故に遭って入院すればいいのに。

私は考えたかもしれない。

亮ちゃんがいなくなればいいのに。

私は願ったかもしれない。

そうすれば、亮ちゃんと二人で買い物に行かなくて済む。はつきりと意識して考えなかったとしても、私は無

意識に考えたかもしれない。絶対に考えなかったとは断言できなかった。私は亮ちゃんと二人で買い物に行きたくなかった。認めたくないけど、そう思っていたのは事実だった。

亮ちゃんは事故で死んだ。私は亮ちゃんと二人で買い物に行かずに済んだ。私の望みどおりになった。

私が望んだから？

そうかもしれない。そうに違いない。

でも、私は亮ちゃんが死ぬことなんて望んでいなかった。そんなことは望んでいなかった。

……本当に？

本当だ。絶対に本当だ。その証拠に。

「坂本センパイ。私とつきあってください」

決して同じ間違いは繰り返さない。そのために必要なことは何だっただけ。今、私と坂本は同じ部の先輩と後輩の関係にすぎない。私が坂本の側に居続けるためには、もつと近くて強い関係を築く必要があった。

例えば、恋人。

足元にはコミック誌が散乱している。私は後先を考えずに口走っていた。坂本は驚いた顔で私を見た。

お願い、断らないで、と私は祈った。

断られたら、私は。

「おれ、中里さんのことが好きなんだよね」と坂本は言った。「実を言うと、こないだ告白してふられたんだ」知ってる。だから、チャンスだと思った。それを知ったのが、告白を決意したきつかけのひとつだった。

「でも、まだ、あきらめたわけじゃないんだ」

「咲子センパイ、秋庭センパイとつきあつてますよ」と

私は言った。中里から二人がつきあうことになった経緯を聞いた。何があつても秋庭と別れる気はないと中里は言った。坂本に望みはない。

「うん、知ってる」

それでも、あきらめるつもりはないと坂本は言った。

「あきらめないって、どうするんですか？ 二人が別れるのをただ待つんですか？」

坂本はかすかに笑うだけで何も答えなかった。

あきらめずに一途に思っているだけでは何も変わらない。そんなのは自己満足だ。

「私、坂本センパイが中里センパイを好きでも構いません。私のこと好きになつてもらえるようにがんばりますだから」

「ごめん」坂本は遮るように言った。「横田さんの気持

ちはうれしいけど、つきえない」

私は目を閉じた。

「片づけの途中で悪いけど、おれ、帰るよ」

私を目を開かない。

「今泉にも謝っておいて」

足音が遠ざかる。私は目を開いた。溜め息をついた。床に散乱しているコミック誌を拾い集め、両手で抱えて廊下に運ぼうとして、急に面倒くさくなつた。そのまま床の上に置いた。腕時計を見た。今泉が部屋を出て行つてから、まだ十分も経っていない。失敗した。最悪だった。

私はパイプ椅子に腰掛けた。私は何がしたいのだろうと考えた。なぜ坂本とつきあおうとしているんだろう。

亮ちゃんが靴紐を結んでくれたことを思い出す。普段はそれほど頻繁にほどけることなんてないのに、亮ちゃんと一緒だとなぜかすぐにほどけることを疑問に思つた。亮ちゃんがデジカメで私を撮影してくれたことを思い出す。撮影した画像データを催促するまで渡してくれないことを不審に思つた。亮ちゃんが両足首を掴んだことを思い出す。びつくりさせようとしたただけだという亮ちゃんの言葉が信じられなかった。

すべては私の思い違いだったのかもしれない。でも、もう確かめることはできなかった。亮ちゃんは死んだ。亮ちゃんが弁解する機会は永遠に失われた。

亮ちゃんは本当は何を考えていたんだろう。小学六年生の私に、亮ちゃんはどんな感情を抱いていたんだろう。わからなかった。もう絶対に知ることはできない。だから、私は亮ちゃんを憎むことすらできなかった。

坂本は亮ちゃんではない。それはわかっている。でも、私は坂本に亮ちゃんの代わりを求めている。それは坂本に対してとても失礼なことだ。

ふられてよかったのかもしれない、と私は考える。

雑誌を頭の上に落とされて、笑いながら眼鏡の位置を直す坂本の顔を思い出す。頭に瘤ができているのに、私の顔を心配そうに覗き込む坂本の顔を思い出す。感情的な私の言葉に反論もせず、ただかすかに笑う坂本の顔を思い出す。

ふられちゃつた、と口に出してみる。

私は泣いた。

(以下、次号)